

20世紀初頭のアメリカにおける歌舞伎「寺子屋」の受容(1)

大塚 奈奈絵
日本大学大学院総合社会情報研究科

The Reception of the Kabuki Play Terakoya in Early 20th Century America (1)

OTSUKA Nanae
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The Pine-tree (Matsu), the English version of the Kabuki play *Terakoya* by M. C. Marcus, was published in 1916 in London and New York. It was staged by the Washington Square Players under the title of *Bushido* in November 1916 and was well received. Although Marcus maintained that he adapted the play from the Japanese, there are several reasons to think that he adapted it from Karl Florenz's German version *Terakoya*.

1.はじめに

平安時代に大宰府に流されて没した菅原道真の天神伝説に材をとった竹田出雲、並木千柳、三好松洛らによる浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』は、1746年に大阪の竹本座で初演されて人気をとり、直後に歌舞伎化されて成功を収めた。中でも竹田出雲による四段目「寺子屋」は独立して演じられることも多く、現代に至るまで最も上演回数が多い人気演目である。

「寺子屋」は、1892年に井上十吉により初めて英訳され、その後、1900年にはカール・フローレンツ (Florenz, Karl Adolf) のドイツ語訳とフランス語訳が出版されてドイツを中心にヨーロッパでは広く翻訳・翻案され、上演されたことが知られている。

1916年1月にロンドンの Iris Pub. Com. と New York Duffield & Com. から出版された M. C. マーカス (Marcus, M.C.) の *The Pine-tree (Matsu) : a Drama, Adapted from the Japanese* は、前半には日本の演劇の歴史の解説が、後半には竹田出雲の最も有名な台本として歌舞伎『菅原伝授手習鑑』の「寺子屋」の段が *The Pine-tree* というタイトルで掲載されていた。

このマーカス版の「寺子屋」は、1916年11月にワシントン・スクエア・プレイヤーズ (Washington Square Players) により *Bushido* というタイトルで上

演されて好評を博した。マーカス版の「寺子屋」は、その後、日本に逆輸入されて日本語に翻訳され、1929年9月には坂東寿三郎らにより大阪の浪花座で『マツ』の題名で上演され (森)、10月には友田恭介らにより東京の本郷座で『テラコヤ』の題名で上演されたことが知られている。(三宅 310)

The Pine-tree は、日本語からの翻訳とされているが、近年では田中徳一によりカール・フローレンツのドイツ語訳 *Terakoya und Asagao* からの重訳の可能性が指摘されている。このため、本稿ではフローレンツの翻訳の特徴を論ずるとともに、*The Pine-tree* をフローレンツのフランス語訳からの他の英訳と比較し、両者の相違点については、ドイツ語訳やフランス語訳、および他の英語訳を参照することにより、*The Pine-tree* がフローレンツのドイツ語訳から重訳であったことを論証する。

2. マーカスによる「寺子屋」の翻訳と受容

2.1 *The Pine-tree (Matsu)* の出版

歌舞伎の人気演目であり、現代でも最も上演回数が多いといわれる『菅原伝授手習鑑』の四段目「寺子屋」は、ヨーロッパでは広く翻訳・翻案された一方で、第二次世界大戦以前に出版された英語訳はわ

ずかである。確認できる英語訳で最も古いものは、1892年の井上十吉訳の*Terakoya, or the Village School*であるが、語学教材として出版されたため¹、国内での出版にとどまり、海外に広まることはなかった。最初に英米で出版されたのは、1916年1月にマーカスによりロンドンのIris Pub. Com.とNew York Duffield & Com.から出版された*The Pine-tree* — (*Matsu*) — : *a drama, adapted from the Japanese*である。

マーカスの「寺子屋」は、黒い表紙に金泥で*The Pine-tree*というタイトルとTAKEDA IZUMOという作者の名前、そして松の絵があしらわれた美しい本で、本文に使われた多くの日本風の挿絵については、大英博物館の許諾を得て所蔵資料を挿絵に使用したとの説明がある。実際、見返しには、国宝『彦根図屏風』の一部が白黒の線描で使われており、挿絵の中には、西鶴の版本の挿絵に酷似したものもあるが、どの挿絵についても出典は明らかにされていない。この時代には、日本美術を石版画で紹介した『国華』などの雑誌が出版されており、流行のジャポニズムを意識して、それらから転載された可能性が考えられる。このことから、この本が、「日本文化」のイメージを凝縮して伝達するパッケージの意図で出版されたものと考えられる。ただし、「寺子屋」は前述したように歌舞伎の人気演目であったために、日本では多くの浮世絵（役者絵）が残され、エキゾティシズムにより、ヨーロッパでも愛好されていたのであるが、この本の挿絵では、舞台を描いた浮世絵は使用されていない。

なお、*The Pine-tree*では、130ページ弱の本文の前半82ページが“*Causerie on the Japanese Theatre*”というタイトルの日本の演劇の歴史の説明にあてられているが、内容には誤りが非常に多い。後半に*The Pine-tree*のタイトルで掲載されている「寺子屋」の翻訳は、サブタイトルに“*adapted from the Japanese*”、“日本語からの翻案”とある。著者のマーカスは、前半の竹田出雲と『菅原伝授手習鑑』についての詳しい解説の中でも、「寺子屋」という呼称や、1900年に出版されたフローレンツの「寺子屋」のドイツ語訳とフランス語訳については一言も触れていない。²むしろ、『菅原伝授手習鑑』の中で最も輝かしい竹

田出雲によるこの一幕は「松」*The Pine-tree*と呼ばれていると説明しているが、これはマーカスの明らかな誤りである。

この*The Pine-tree*については、田中徳一はフローレンツの翻訳の特徴をあげ、それら全ての特徴が見られることから、日本語「寺子屋」からの直接の英訳ではなく、「フローレンツのドイツ語訳からの重訳である可能性が高い」(272)と指摘している。田中は、さらに、二十世紀初頭に、フローレンツのように言語的にも学問的にも日本の文学・文化に通暁した西洋人は極めて少ないと述べている。翻訳者のマーカスについては言及している資料が乏しく、また、日本演劇の紹介部分には誤りが多い一方で、他に著作もないことから、マーカスが日本の文化や日本語についてどの程度の知識があったのかについてはよく分かっていない。

2.2 *Bushido* の上演

この英語版の「寺子屋」は、1916年11月にワシントン・スクエア・プレイヤーズにより*Bushido*というタイトルで上演された。このタイトルが、1900年に新渡戸稲造により、フィラデルフィアで出版された*Bushido: the Soul of Japan, an Exposition of Japanese Thought*に由来することは言うまでもないであろう。*Bushido*は、アメリカで出版された後、日本でも出版され、両国で版を重ねるとともに、短い期間にドイツ語をはじめとする数多くの言語に翻訳された。*Bushido*は海外の人々に日本の武士道を説明することを目的に著述された図書であり、武士道の概念を分かりやすく説明するために、東西の著名な哲学者の言葉や様々な逸話を縦横に参照していた。歌舞伎の作品では「忠臣蔵」や「先代萩」なども紹介されていたが、特に“The Duty of Loyalty”（忠義）の章では「寺子屋」のあらすじがLoyaltyの例として1ページ以上にわたって詳しく紹介されていた。

ただし、ここでは、日本の歴史上著名な人物である菅原道真に関する物語と紹介されているのみで「寺子屋」というタイトルは使われず、話の舞台が道真の息子をかくまう源蔵の寺子屋(village school)であるとのみ書かれている。また、物語前半の詳細

な説明に対して、その後半は省略され、舞台を松王の自宅であると説明するなど、歌舞伎一竹田出雲の「寺子屋」一の本래の筋立てや設定とは異なっている。日本を長く離れていたために新渡戸の記憶が正確でなかったのかは不明である。

舞台劇 *Bushido* は、非常な好評を博し、当時の *New York Times* の批評では“nobility”という言葉を使って称賛された。(“Japanese”) *Bushido* を上演したワシントン・スクエア・プレイヤーズは、のちにシアター・ギルドと改名したアメリカの小劇場運動の草分けであり、*Bushido* は、その後も様々なタイトルで他の小劇場で上演されたと言われている。(Eliot v)

なお、この上演では、当時、アイルランドの詩人イェーツが日本の能に影響されて書いた舞踏劇「鷹の井戸」に出演する等、世界的に活躍していた舞踏家 Michio Ito (伊藤道郎、1893-1961) が、ワシントン・スクエア・プレイヤーズの依頼により、共同ディレクター兼舞台デザイナーを務めたことが知られている。³ この演出では、松王の首実験の場に伴奏として、アメリカ人には悲しげに聞こえた「カッポレ」が使われたといわれている。(園 39)

新聞の批評では、劇のタイトルである *Bushido* は“a vassal's loyalty”(サムライの忠義)の日本語であると説明した上で、首実験の場の息詰まるような緊張感によって、「この劇は、ワシントン・スクエア・プレイヤーズの歴史の中でも最も興味深く、成功したプログラムである」として、我が子を犠牲にする悲嘆とその感情を抑えて首実験に臨む松王丸役の José Ruben の気品のある演技を絶賛している。(Woollcott 6)

2.3 日本での逆演

マーカス版の「寺子屋」の成功が、日本でも話題になったことは、例えば、1919年の読売新聞の記事に「此「寺子屋」は数年前独逸人マルクス氏によって独逸訳され、それが「武士道」という名で英訳され紐育で上演されたとき非常な人気で深い感動を与えた。」と紹介されていることから明らかである。ところでマーカスは英語訳のみであり、ここで言われている独逸訳は誤りかフローレンツと混同した結

果であろう。この記事では、山田耕作が「山東問題等において我国が米国人に誤解されていることを遺憾として我国武士道を米国にプロパガンダするために」、「寺子屋」のオペラの作曲をはじめたとも書かれているが、この作品は未完に終わっただけである。

なお、伊藤道郎は小山内薫とも親しく、その縁で、昭和の初期に日本の新劇でも逆輸入の「寺子屋」が演じられた。1929年9月には、坂東寿三郎らにより大阪の浪花座で田中総一郎の翻訳の『マツ』が、10月には友田恭介らにより同じ脚本が東京の本郷座で『テラコヤ』のタイトルで上演されたが、これには賛否両論があったようである。(紀ノ岡 107) マンスフィールド訳の『忠義』が歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』を翻案したものであるのに対して、*The Pine-tree* は原作にほぼ忠実であるとして好意的な評価がある一方で、「アメリカ」を強調したこっけいな化粧や衣装は不評で、再演はされなかった。いずれにせよ、日本が軍事国家に向かう道りの中で、「寺子屋」は、以後、「世界に通用する悲劇」(河竹 214)として称揚されることになるのである。

2.4 マーカスによる翻訳について

2.4.1 「寺子屋」の翻訳の特徴

田中徳一は、フローレンツの「寺子屋」の翻訳の特徴として、以下をあげている。

- ・原作にない寺子「トクサン」を登場させている。
- ・武士が格調高く台詞を交わすところは五脚のイアンボス詩句で、そうでないところは散文で翻訳している。
- ・扇忘れの趣向を取り入れている。
- ・「急ぎ首打って出すや否や」という台詞を、「二時間以内に秀才の首を差し出さないと」というように、具体的にしている。
- ・首実験の詳細な仕草指示をしている。
- ・松の短冊の投げ込みと「いろは送り」がない。

このうち、扇忘れの趣向については、松王丸の妻千代が扇を忘れたふりをして、子供の顔を見に戻るといふ演出が、1884年に大阪で出版された中西貞行『演劇台本菅原伝授手習鑑』、1885年に大阪で出版された魁竜玉(阪田玉助)著『演劇脚本』と共通していることから、おそらくは、フローレンツ、ある

いはマーカスが翻訳に使用した台本に由来するもの
と考えることができる。

また、松の短冊の投げ込みや「いろは送り」がな
いという点については、フローレンツ自身が、翻訳
に際して竹本、すなわち、語り・ナレーションの部
分を省略し、台詞として補足したことを序文で説明
している。

翻訳に際しては必要に応じて、時には原文に密
着して、時にはかなり自由に訳した。原文の技巧
から離れたのは、主に叙唱（レタティーヴォ）を
人物のセリフに取り入れたり、情景描写やト書に
した個所である。（中略）「寺子屋」に於いては、
叙唱がドラマ構成全体に対して持つ役割は副次的
であり、通読に際してはむしろ邪魔になると判断
したからである。（ドイツ語版「寺子屋」序文の翻
訳）（石澤 168）

前述したように、マーカスの *The Pine-tree* には「日
本語からの翻案」との但し書きがつけられている。
しかし、田中徳一の指摘では、*The Pine-tree* には、
フローレンツの翻訳の全ての特徴が見られることか
ら、日本語からの直接の英訳ではなく、フローレン
ツのドイツ語版を翻訳したものである可能性が高い。
一方、フローレンツのフランス語版「寺子屋」の英
訳としては、サミュエル・エリオット（Eliot Jr.,
Samuel A.）による “*Bushido, adapted from Terakoya or
The Village School otherwise called Matsu, the Pine-tree
by Takeda Idzumo,*” が 1921 年に出版された *Little
Theater Classics. Vol. 3* に収録されていて、この翻訳
については、エリオット自身が一部の台詞を改変し
たことを序文で説明している。

このため、*The Pine-tree* とエリオットの *Bushido*
の本文を台詞とト書きを整理し、対応する個所を比
較した。予想されるように、*The Pine-tree* がフロー
レンツのドイツ語訳からの重訳であれば、フランス
語版からの重訳である *Bushido* にも基本的に同じ特
徴がみられるはずである。他方、*The Pine-tree* と
Bushido の翻訳が相違する場合には、*The Pine-tree* が
著者マーカスの主張するように、日本語からの翻訳
である場合や、エリオットが翻案した場合等の可能

性が考えられる。このため、*The Pine-tree* と *Bushido*
の翻訳に相違がある部分については、フローレンツ
のドイツ語版とフランス語版の原文に相違がないか
を改めて確認し、さらに井上十吉の翻訳やその後の
他の翻訳者による英訳等を参照し、比較を行った。

2.4.2 フローレンツ訳と *The Pine-tree* の一致点と相 違点

① フランス語版、ドイツ語版との比較

次の表は、田中徳一が指摘しているフローレンツ
のドイツ語訳に見られる特徴を、フローレンツのフ
ランス語版、マーカスの *The Pine-tree*、エリオット
の *Bushido* と比較したものである。

独語版の特徴	仏語版	<i>Pine-tree</i>	<i>Bushido</i>
寺子「トクサン」	○	○	○
武士の台詞のみ 韻文	×	○	×
扇忘れの趣向	○	○	○
「二時間以内」	○	○	○
首実検の仕草指 示有	○	○	○
松の短冊の投込 無	×	×	×
「いろは送り」無	×	×	×

興味深いことに、フローレンツのドイツ語版とフ
ランス語版には相違があることが分かる。ドイツ語
訳では、武士の台詞に韻文を使用しているが、フ
ランス語訳では全体が散文で訳されている。これは、
特にフランス語において、外国の韻文は一貫して散
文として翻訳される（ピム 116）ためであろうと思
われる。

ただし、これ以外にも、ドイツ語版とフランス語
版の相違に起因すると思われるささやかな相違点
はある。例えば、戸波が千代に持参した堺重の煮しめ
を差し出す「此堺重は子達への土産。…我子に世話
を焼豆腐。つぶ椎茸の入りたるは…」という箇所は、
The Pine-tree では、“And the contents of this box (she
gives Mistress Tonamee the second parcel) are for your

boys, your pupils.”となっているが、*Bushido* では、
 “Here (presenting the other box) are some sweets for all
 the boys to share.”と菓子を差し出すように変えられて
 いる。これについては、フローレンツのドイツ語
 版とフランス語版の本文を参照したところ、原文の
 相違に起因していることが判明した。

②「せまじきものは宮仕へ」

田中徳一は、フローレンツの「寺子屋」を基にし
 たドイツ・オーストリア・ガリチアでの様々な翻訳
 を比較して、「原作に近い厳粛な身代わりの忠君劇に
 なっている」として、「専ら祖国のための自己犠牲の
 視点からのみ受容されたように、「せまじきものは宮
 仕へ」というような、原作に込められた人間的な独
 特の人生観が反映されているとは言い難い」と評し
 ている。(田中 271)

日本においては、小太郎を秀才の身代わりに、場
 合によっては母ももろともにと決意した源蔵と戸波
 の嘆きの場面の「弟子子と言えは我が子も同然、今
 日に限って寺入りしたは、あの子が業か母御の因果
 か、報いはちが火の車、追っ付け廻ってきましょ
 うと、妻が嘆けば夫も目をすり、せまじきものは宮
 仕えと、俱に涙にくれ居たる。」が、「寺子屋」の前
 半でのクライマックスとされている。この部分は、
 江戸・東京の歌舞伎の上演では源蔵と戸波の掛け合
 いで演じられ、一方、上方では通常、「妻が嘆けば夫
 も目をすり、せまじきものは宮仕えと、俱に涙にく
 れ居たる」の部分は竹本で語られることが多いので
 あるが、フローレンツ系の翻訳では、この部分全体
 が戸波のセリフとなっている。

これは、「せまじきものは宮仕へ」は、「寺子屋」
 の名セリフとされていたが、フローレンツが「寺子
 屋」を翻訳したと考えられる明治 20 年代末は、天皇
 への配慮によって、元々は源蔵のセリフであった「せ
 まじきものは宮仕へ」を女である戸波に言わせたり、
 それを源蔵が打ち消すなどの演出が行なわれ、そう
 した台本をフローレンツが使用した可能性が考えら
 れる。

<ドイツ語版>

Tonami : Wohlan denn, sein wir Teufel, da wir's

müssen .

(Weinend) Ach, unglücksel'ges Kind! Unsel'ge Mutter,
 Die diesen Tag gewählt, ihr liebstes Kleinod
 Uns zu vertraun. Und wehe über uns,
 Die wir ihm Vater, Mutter sollen sein,
 Nun seine Würger: Welche bitter Pein!

<フランス語版>

TONAMI : Eh bien! soit, puisque notre sort le veut
 ainsi, ne reculons devant rien. (Sanglotant.) Pauvre
 enfant! Pauvre mère! Aujourd'hui même elle nous a
 confié ce qu'elle a de plus cher, et nous violâ obligés
 d'égorger cet enfant auquel nous devrions servir de
 père et de mère. Malheur à nous!

The Pine-tree

MISTRESS TONARMEE :

Well, let us be devils,
 If it can't be otherwise. (Crying) Oh, wretched child,
 Ill-fated mother! Why did she come to-day
 Entrusting us with he beloved treasure?
 And woe to us who undertook to be
 His father, mother—and who'll butcher him.
 Oh, day of grief and sorrow, mournful day!

Bushido

TONAMI: So be it, O Gods! Since fate will have it so.
 Let us recoil at nothing! Oh, poor child, poor mother!
 This very day to have entrusted him whom she holds
 most dear to us! — and we, miserable! compelled to
 sacrifice a child to whom we should be father and
 mother!

これらの翻訳では、原作の「業」や「因果」、「火
 の車」という、逃れられない宿命の中で、罪におの
 のく人間の感情を表す仏教用語は、devils や Gods、
 fate に置き換わっているが、「妻が嘆けば夫も目をす
 り、せまじきものは宮仕えと、俱に涙にくれ居たる」
 という部分に対応する翻訳部分が見当たらない。

例えば、先行の井上十吉訳や、戦後の Jones によ
 る翻訳では、「せまじきものは宮仕へ」に相当する訳

は以下のようになっている。

<井上十吉訳>

Tonami: Ah, what we should most shun is service at Court.

Recitative: While they are weeping together, enters・・・

<Jones 訳>

GENZO: None suffer such hurt and sadness as those lowly ones who serve noble masters at the court.

NARRATOR: Both are dissolved in tears/

フローレンツは、翻訳に際して竹本の部分を省略したと説明しているため、フローレンツが翻訳した台本では、「妻が嘆けば夫も目をすり、せまじきものは宮仕えと、俱に涙にくれ居たる」が竹本で語られていたために、フローレンツが省略した可能性が考えられる。*The Pine-tree* においても、このセリフは省略されているが、フローレンツ系以外の翻訳では省略されているものはないことから、*The Pine-tree* がフローレンツ訳からの重訳であると言える。

なお、「せまじきものは宮仕え」というセリフに相当する部分が省略されたことは、劇としての「寺子屋」の印象にきわめて大きな影響を与えたものと思われる。何故ならば、犬丸が指摘しているように、「せまじきものは宮仕え」には「究極の選択に迫られた中に、一縷の人間性の光がある」ことを感じさせるからである。

『菅原伝授手習鑑』では、能書家である菅丞相が、不義により破門された源蔵の書道の腕を認めて筆法の極意を伝授する「筆法伝授」を受けて、「寺子屋」の場の展開となる。「源蔵戻り」と呼ばれる花道での歩みですべてが決まるとまで言われ、律儀な源蔵が恩師の息子である秀才を助けるために罪のない子を手にかけて地獄に落ちることを覚悟して苦しみ、「せまじきものは宮仕え」と嘆く故に大衆に愛され、「一貫して源蔵の芝居だからである」(野口 145)と評されてきた。

ところが、フローレンツによる翻訳では、三人の作者がそれぞれ三組の親子の別離を描いたとされる演劇としての全体性がなく、「筆法伝授」という伏線

も、「源蔵戻り」も「せまじきものは宮仕え」の名セリフもなくなって、源蔵の存在の影は薄くなり、それに対比されるように、松王丸の忠義が強調される結果となっている。

このため、前述したような新渡戸稲造の *Bushido* の出版や、折からの日露戦争での日本の勝利と第一次世界大戦を背景として、フローレンツ翻訳の「寺子屋」は、主君への忠義のために息子を捧げる一幕劇としてヨーロッパで広く受容されたものと考えられ、フローレンツの翻訳の重訳である *The Pine-tree* もアメリカにおいて同様に受容されたと考えられる。

なお、フローレンツによる翻訳とマーカスの翻訳は、それぞれのセリフの単位やト書きの内容までが一致しているが、相違している点もわずかに1箇所存在する。フローレンツは、前述したようにほとんどの竹本を省略してト書きに組み込んだが、松王丸らが源蔵の寺子屋に乗り込む場面の竹本は残しており、その個所をマーカスが削除しているのであるが、内容的な影響はほとんど見られない。

3.おわりに

以上に述べてきたように、マーカスによる *The Pine-tree* とその他の「寺子屋」の英語の本文を比較した限りでは、フローレンツの翻訳に見られるすべての特徴がマーカスの翻訳にも共通してみられた一方、相違点は1箇所のみであった。このことから、マーカスによる「寺子屋」の翻訳は、田中徳一の指摘の通り、フローレンツのドイツ語版をかなり忠実に英訳したものであることは明らかである。その結果として、井上十吉の英訳を除けば、第二次世界大戦前に世界中で翻訳・翻案された多くの「寺子屋」は、すべてカール・フローレンツのドイツ語またはフランス語の翻訳から重訳されたものであったと言える。

フローレンツによる翻訳は、その時代性もあり、読者の分かりやすさを配慮し、セリフの一部が省略されるなどした結果、原作に忠実な翻訳というよりもフローレンツの西欧的な視点からの翻案と呼ぶことがふさわしい忠誠の物語となっていた。また、『菅原伝授手習鑑』という長大な物語の一幕である「寺子屋」の段のみを独立して翻訳したために、物語の

他の部分とのつながりが希薄になり、その結果として、松王丸夫婦の忠義がより強調される結果を生んでいた。

このため、マーカスは、出版に際してタイトルを源蔵の悲劇の場である「寺子屋」から、松王丸の悲劇を意味する「松」に変えたものと推測される。

ところで、1900年に新渡戸稲造がアメリカのフィラデルフィアで出版した *Bushido* の1905年の増訂10版の序文では、ルーズヴェルトがこの本を読み、友人に配ったことが語られている。クリストファー・ベンフィー (Christopher Benfey) によれば、柔道に凝っていたルーズヴェルトとその息子達に柔道着とともに *Bushido* を贈ったのは新渡戸とも親しかったビゲロウであり、当初 *Bushido* を好きになれなかったルーズヴェルトが *Bushido* を日本人の実際の哲学を書いたものではなく、外国向けに加工されたものではないかという感想は自然なものであったと思われる。

なお、新渡戸は、「寺子屋」の松王丸が息子を主人の息子の身替りとしたことを『旧約聖書』のアブラハムがイサクを犠牲にした話と同じくらい意義深くそれ以上に嫌悪すべきものではないと述べているが、これは、後にドイツでの「寺子屋」の上演の際の新聞評に、同様にアブラハムとイサクの物語と比較があったこと (中村吉蔵 315) と共通している。新聞記者が *Bushido* を読んでいた可能性も考えられるが、いずれにしろ、新渡戸の日本人にとっての「忠義の義務」は、西欧人にとっての神の声と同じものであるという説明が受け入れられたものと考えられる。

Bushido の出版後、1904-05年の日露戦争における日本の勝利は欧米に大きな衝撃を与えた。さらに1912年の明治天皇崩御に続く乃木希典夫妻の自決は、*Bushido* の言葉とともに世界中で報道された。翌1913年には、乃木を称えるスタンリー・ウォッシュバン (Stanley Washburn) の *Nogi, a Great Man Against a*

Background of War (日本語タイトル『乃木大将と日本人』) がロンドンで出版された。日本文化に対して好意的な感情を持っていた当時のアメリカの東海岸の知識層にとって、新渡戸の *Bushido* は、日本の侍の精神を現したのものとして広く受け入れられていたのであろう。そして、このような「日本精神の本質＝武士道」という日本理解を背景に、「寺子屋」がマーカスによって忠義のために息子を捧げる松王丸の忠義の物語 *The Pine-tree* として翻訳されたと考えられる。

マーカスの翻訳による *The Pine-tree* を *Bushido* のタイトルで上演したワシントン・スクエア・プレイヤーズは、当時の商業演劇に対して知識人の青年らが中心となって芸術的な演劇を目指した新進の劇団であった。*Bushido* の中で我が子の犠牲を厭わない忠誠の例として紹介され、取り上げられた「寺子屋」すなわち *The Pine-tree* を *Bushido* のタイトルで上演したことは、松王丸が君主のために我が子を犠牲にする忠誠心こそが日本の「武士道」の真髄であるとの認識が当時のアメリカ国内の理解であったためであると考えられる。

<参考資料>

- 赤坂治績『知らざあ言って聞かせやしょう 心に響く歌舞伎の名せりふ』新潮社 2003
 石澤小枝子『ちりめん本のすべて』弥井書店 2004
 伊藤道郎『アメリカ』羽田書店 1940
 犬丸治『菅原伝授手習鑑 精読 歌舞伎と天皇』(岩波現代文庫) 岩波書店 2012
 魁竜玉『演劇脚本』大阪：梅原忠蔵 1895-96
 河竹登志夫『演劇の座標』理想社 1959
 紀ノ岡杏華「當世看客氣質」『歌舞伎』1929.12 104-8.
 ヘレン・コールドウェル 中川鋭之助 訳『伊藤道郎：人と芸術』早川書房 1985
 佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』春秋社 1995
 園義雄『アメリカ新劇史』五月書房 1951
 田中徳一「ドイツ、オーストリア、ガリチアにおける『寺子屋』劇受容の概観」日本比較文学学会編『世界と出会う日本文学—日本比較文学学会創立60周年記念論文集』彩流社 2011 261-73.

中西貞行『菅原伝授手習鑑』 大阪：中西貞行
1894

中村吉蔵「独逸座の寺子屋劇」『最近欧米劇壇』博文
館 1911 307-16

中村哲郎『西洋人の歌舞伎発見』 劇書房 1982

新渡戸稲造 岬龍一郎訳『武士道 今依って立つべ
き“日本の精神”』 PHP 研究所 2005

野口達二『歌舞伎 入門と鑑賞』 演劇出版 1991

アンソニー・ピム 武田珂代子訳『翻訳理論の探求』
みすず書房 2010

クリスロファー・ベンフィー 大橋悦子訳『グレイ
ト・ウェイブ 日本とアメリカの求めたもの』 小
学館 2007

三宅三郎『歌舞伎劇鑑賞続』三田文学出版部 1943

森ほのほ「英訳寺子屋の逆演—浪花座第一劇場—」
『演芸画報』82(1929): 82-5.

「山田耕作氏新作歌劇『寺子屋』の上演 日本武士
道鼓吹の為め明春紐育に上演されん」『読売新聞』
39 1919 朝刊

Eliot Jr., Samuel A. “Bushido, adapted from Terakoya or
The Village School otherwise called Matsu, the
Pine-tree by Takeda Idzumo,” *Little Theater Classics*.
Vol. 3. Boston: Little Brown. 1921. [1]-49. Chaleston:
Bibliolife, [2011].

Ernst, Earle. *Three Japanese Plays from the Traditional
Theatre*. London: Oxford UP, 1959.

Florenz, Karl. *Scènes du Théâtre Japonais: L'école de
Village: Terakoya: Drame Historique en un Acte*.
Tokyo: T. Hasegawa, 1900.

Florenz, Karl. *Terakoya und Asagao*. Tokyo: T.
Hasegawa, 1900.

Inoue, Jukiti. trans. *Terakoya, or the Village School*.
Tokyo : T. Yoshioka, 1892.

“Japanese Tragedy Admirably Staged, “Bushido” the
Climax at the Washington Square Players’ Finest
Program.” *New York Times*, 14 Nov. 1916, p. 8.

Jones, Stanleigh H. Jr., ed. and trans. *Sugawara and the
Secrets of Calligraphy*. New York: Columbia UP,
1985.

Marcus, M. C. *The Pine-tree (Matsu) a Drama, Adapted*

*from the Japanese; with an Introductory Causerie on
the Japanese Theatre*. New York: Iris, 1916.

Nitobe Inazo. *Bushido: the Soul of Japan, an Exposition
of Japanese Thought*. Tokyo: Shokwabo, 1901.

Pronko, Leonard. “Terakoya: Kabuki and the Diminished
Theatre of the West.” *Modern Drama*. 8(1965): 47-57.

Scott, A. C. *The Kabuki Theatre of Japan*. London :
Allen & Unwin, 1956.

Woolcott, Alexander. “Second Thoughts on First
Nights.” *New York Times*, 19 Nov. 1916, Sec. II, p. 6.

¹1888年の『第一高等中學校入学試業科目例題』の広
告頁には他の教科書と並んで井上十吉訳の『菅原伝授
手習鑑 寺子屋ノ段』が近刻として掲載されている。

²1904年以降、フローレンツの「寺子屋」はドイツを
中心にヨーロッパでは度々上演され、翻案も出版され
ていた。マーカスは、日本の新聞記事では「独逸人マ
ルクス」と紹介されていることからドイツ系の人物で
あると考えられ、フローレンツのドイツ語訳を知らな
かったとは考え難い。なお、マーカスは、歌舞伎の部
分の解説の中で、日本では比較的知名度の低い『朝顔
日記』も紹介し、ヒロインの美雪をシャクンタラーと
比較しているが、ここでも、『朝顔日記』がフローレン
ツにより翻訳され「寺子屋」と一緒に刊行されている
ことには言及していない。

³伊藤道郎は、後に、その著『アメリカ』の「アメリ
カ気質 「忠臣蔵」と「寺小屋」より」で、以下のよ
うに回想している。

「忠臣蔵」を見た米国人が、何て馬鹿なことをす
るんだらうと言った。身命をなげうって主君の讐を
報ずるといふことが理解出来ぬらしい。主君の遺恨
を継承するといふこともわからぬかもしれぬ。第一
彼らは犠牲といふことは馬鹿げたことだと思つてゐ
る。ところが、この米国人が「寺子屋」を見て泣い
た。勿論その時、私は英語で上演したのだが、キャ
ツキヤと騒いでみたアメリカ人達が涙をながしてシー
ンとしてしまった。リンドバークの子供が殺され
たときに民衆のうけたショックは大きなものだつた
が、あゝいふ気持から「寺子屋」には感激したのだ
らうと思ふ。(41)

(Received:December 20,2013)

(Issued in internet Edition:February 7,2014)